

こめ蔵プロジェクト

<http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~ymzknk/kome/>

植村麻紀子（神田外語大学）

鈴木慶夏（釧路公立大学）

中西千香（愛知県立大学）

西 香織（北九州市立大学）

山崎直樹（関西大学）

「シマ・トーク」の進めかた

1. 当プロジェクトのメンバーが2人1組になり、1組が1つの「シマ」を作ります。
2. シマは計2つできます。
3. 第1回のセッションでは、参加者は、どちらかのシマに行ってください。
4. 1回のセッションは「表」と「裏」に分かれます。
5. 表では、シマのメンバーのうち、1人が自分の成果を報告します。
6. もう1人のメンバーが進行役になって、報告者と参加者が至近距離で膝詰めで討論をします。
7. 裏では、報告者と進行役が交代します。
8. 休憩を挟んだ第2回のセッションでは、参加者がシマを変えます。
9. 以下、同じ作業の繰り返し。

中国語教育の基盤の再設計にむけて—中国語の教材作りはゆるくない

発行日: 2013年3月9日
発行者: 山崎直樹（関西大学外国語学部）
住所: 〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
 関西大学外国語学部山崎研究室
印刷: 関西大学生協

中国語教育の基盤の再設計にむけて

— 中国語の教材作りはゆるくない —

公開ワークショップ

2013年3月9日（土）13:20～16:50

早稲田奉仕園YOU-Iホール（東京都新宿区西早稲田2-3-1）

13:20-13:30 趣旨説明・ワークショップの進めかたの説明

13:30-14:30 シマ・トーク第1回

14:50-15:50 シマ・トーク第2回

16:00-16:50 パネルディスカッション～

『中国語教育の基盤の再設計』の構成と内容について



事前申し込み不要

中国語教育に取り
組んでいらっしゃる
かたならどなた
でも参加できます

書籍『中国語教育の基盤の再設計』の構成（案）

第1章 目標のない授業はありえない～バックワード・デザイン

- 1.1 ゴールを先に決めるという設計
- 1.2 ゴールを決めたら評価方法を決める
- 1.3 大きな目標から小さな目標へ★

第2章 学習項目は自分で考えて選べ～バックヤード・デザイン

- 2.1 課題解決に必要な文法的知識を考える
- 2.2 課題解決に必要な談話構成的知識を考える

第3章 あなたは何も知らない～中国語は奥が深い

- 3.1 あなたはミソもクソもいっしょにしている～これまでの「文法」では不十分
- 3.2 その言いかた、失礼では？～語用論的視点・社会言語学的視点★

第4章 インプットのためのくふう

- 4.1 学習者はアホじゃない～自分で知識を獲得するためのscaffolding
- 4.2 Focus on Form
- 4.3 Input Processing

第5章 アウトプットのくふうとその評価

- 5.1 タスクベースで考える
- 5.2 アウトカムベースで考える
- 5.3 ルーブリックによるパフォーマンス評価★

第6章 課題解決に必要な能力は言語能力だけではない

- 6.1 「文化」を使いこなす★
- 6.2 協働、高度思考、他との連携
- 6.3 学習リソースにアクセスできる学習者を育てるために

目標分解と学習要素設定のシステム — 遠隔ゴールから直近ゴールへ（山崎）

次の手順により学習項目を設定するシステムを紹介する。

1. 「コミュニケーションなゴール（※）」を設定する。※最終的な到達目標＝最終的な評価の対象となる成果物／パフォーマンス
2. そのゴールに到達したことを示す「証拠」を手に入れるテストを考える。
3. そのテストに合格するためには（そして良い成績をとるためには）学習が何を知っていてどんなことができればよいかをリストにする。
4. そのリストの項目を1つずつ消化するためにはどのようなゴール（より小さなゴール）を設定すればよいかを考える。
5. [2]に戻って、同じ作業を繰り返す。それ以上、小さなゴールに分解できなくなったら、そこで学習要素設定は終了する。

呼称から見た中国語コミュニケーション・ルール — 「上下」「親疎」のものさしをいかに使うか（西）

外国語によるコミュニケーション能力を高めるには、その言語の文法知識等のほか語用論的知識も必要である。しかし教科書に語用論的な記載がないことが少なくない。たとえば二人称代名詞“您”は辞書や教科書には“你”の敬称、「あなたさま」などと書かれているが、果たしてこの説明で学習者が“您”を適切に使えるだろうか。また、“小张”、“小李”等の“小一”には「姓などの前につけて親しみを表す接頭辞」「～さん」「～ちゃん」などと書かれているが、“小一”＝「～さん」と理解して日本語で「～さん」と言うべきところを中国語ですべて“小一”と置き換えた学習者、年上の「～さん」を“老一”、同世代、年下に対する「～さん」を“小一”と覚えていた学習者もいたが、これらは本当に学習者の誤りだろうか。教師、教科書のせいではないか。今回は、呼称を中心に日中の大まかな「上下」「親疎」の物差しの違いについて考察したい。

ルーブリックによる評価の波及効果（植村）

今回のワークショップでは、ルーブリックによるパフォーマンス評価の実例を紹介し、特にその波及効果に焦点をあてて考察したい。ルーブリック（評価表）を活動開始時に提示することで、学生たちがプロジェクト作品の作成やプレゼンテーションの方法をどのように工夫したかに注目する。

ルーブリックの項目の立て方や加重化には、教師が重視したい点を反映でき、それはすなわち、学習者に「何を」「どのように」学ぶべきか、「どのくらい」できたら目標達成といえるのか、を明確に示すものとなる。すなわち、ルーブリックは、その使い方次第で、学習者を測るものさしとしてだけでなく、学習の指針を示すものとなる。学習を進める過程で用いれば、現在の到達度と今後の課題を学習者にフィードバックできる。また、学習者同士の相互評価や自己評価の際にもルーブリックを用いることができる。

以上の点をふまえた上で、パフォーマンステスト以外の評価にも、広くルーブリックを用いることができないか、についても考えてみたい。

テキスト・授業の中にいかに文化理解を盛り込むか（中西）

本報告では、中国語教育の中でどのように文化理解を取り入れていけばよいかを考える。現在の教育現場では、文法・会話・語彙習得が中心になっているが、さらに文化的情報をそこに盛り込むことで、学習者により円滑なコミュニケーション能力を習得させることができる。

これまでの外国語教育における文化理解は、原文の作品を読むことや映画をみること、他の関連科目にその多くを任せてきた。しかし、どんな形で学ぼうと、そこに「気づき」がなければ、意味をなさない。

今回は文化の中でも、言語を話す国、人々の生活様式（culture with a small c（小文字のc文化））にポイントを置き、語学教育の中で可能な文化理解のアプローチの方法、現在出版されているテキストに文化理解がどのようになされているか、今後語学の授業の中で文化理解を盛り込むにはどのような方法があるか議論し、提案したい。